Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-12-05

会話分析の課題と方法

樫村, 志郎

(Citation)
実験社会心理学研究,36(1):148-159

(Issue Date)
1996

(Resource Type)
journal article

(Version)
Version of Record

(Rights)
© 日本グループ・ダイナミックス学会

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90006540

The Japanese Journal of Experimental
Social Psychology. 1996, Vol. 36, No. 1, 148-159

会話分析の課題と方法

樫 村 志 郎
神戸大学

要　　約

会話分析は，会話者自身が会話をする中で，作り出し，利用する，秩序性を判別し，定式化しようとする，経験的分析である。そのような「自然な」秩序性には，ターンとその内部的構造化，後続するターンによる先行するターンの解釈提示，複合的で延長されたターンの維持管理，順番のローカルな配分，「問」と「答え」のような隣接発話対に代表される順番連鎖の制御構造，制度的に特徴あるそれらのバリエーションが含まれる。本稿では，これらの会話現象の構造ないし形式的特性と会話分析の方法論的基準との間の関連が論じられる。つぎに，あるエスノグラフィックな調査研究の現場における会話が分析され，それらの会話現象が現に存在する会話の形式的構造を作り上げていることが例証される。最後に，それらの会話が，通常の会話であると同じ仕方の中で，同時に，エスノグラフィックな調査インタビューとしての制度的特質を示していることが示唆されることを示す。

キーワード：会話分析，方法論，エスノメソドロジー，エスノグラフィー，調査インタビュー

1．はじめに

社会に生きる人間は，あらゆる機会に他者との交流をおこなっているが，そのほとんどの場合に，秩序だった発話交換，つまり「会話」とよぶことのできる相互行為をおこなっている。会話という行為は，いうまでもなく，哲学，言語学，社会学，心理学など多くの学科から注目を集めてきた。対話という行為に哲学的認識の理想的条件を見いだすこと，方言や敬語のあり方の主要な一つとして会話表現を研究すること，子供の文化を明らかにしたり，論理的思考の発達を検討するために子供の会話を記録すること，などがその例である。その際には，会話は，存在，言語，社会，心，といった，各々の学問的思考の本来の対象について何事かを明らかにするために研究の対象とされている。

会話分析（conversation analysis）の名でよばれる研究領域は，エスノメソドロジーとよばれる研究視角に依拠し，ハーヴェイ・サックス（Harvey Sacks）を中心とする一群の研究者によって，1960年代後半以降発展してきたものである。これは，上記のさまざまな会話研究とある程度の連続性をもちながら，会話の秩序性それ自体に焦点を定めるという点で，独特の方法と対象をもつ研究領域としてあらわれてきた[1]。

本稿では，会話分析によって明らかにされる会話の秩序性がいかなるものなのかを紹介しつつ，現実の会話データを分析する際の会話分析作業をある一貫した方法論的視点から解釈することを目標とする。というのは，会話分析研究は，その独特の方法的基準を前提にしつつ具体的な分析を行うときにもっとも有用な成果をあげることができるにもかかわらず，その基準，分析技術，その間の関連性は理解しやすいとはいえないからである。

つぎの順序で叙述を進めたい。まず，2では，会話分析の方法的特質について一般的に紹介し，会話分析の作業を一貫して貫く分析的視点を提示する。3－6では，ある特定の会話データを用いて，標準的分析技術のいくつかについて説明を試みる。会話分析において用いられる特有の技術としてのトランスクリプトの性質（3），順番の構成（4），順番連鎖の効果（5），順番配分の諸装置

(6) を順次とりあげる。最後に，7では，会話分析の標準的技術を，社会制度的な場面に適用する可能性について論ずる。社会制度は，知識，規範，役割，イデオロギー等の複合体であるから，ここでは，会話を通じて，制度的構成要素がいかにして提示され構成されていくかを中心に解明を試みる[2]。

2．会話分析の方法的特質

会話分析の一般的な方法的基準はつぎのようにまとめることができよう。

第1の基準は，「会話分析は，会話の記録や想像ではなく，現実の会話をあつかう」ということである。想像された会話とは，例えば，演劇的シナリオの台詞，小説の中の会話などであり，会話の記録とは，議事録や速記録，座談会記事，通常の社会学的インタビューの引用などである。これらは十分なデータであるとは見做されない。それはせいぜい会話によって構成された意味を，舞台や記事のような媒体を通じて表現したり報告したりするものにすぎないからである。

第2の基準は，「会話分析は，会話の内容を素朴にとりあつかうのではなく，その語りの方法にそくした形式的分析をめざす」ということである。ここで，その語りの方法とは，会話の当事者が，自己または共同会話者の声や身体を用いて，会話を「通常の会話」としての秩序ある統一性のもとで構成する，そのやり方のことである。会話分析が用いる詳細なトランスクリプト（会話記録）は，声や身体の詳細を分析するための技術である。

第3の基準は，「会話の諸方法は，会話の当事者が会話の現場において従うことができる方法でなければならない」ということである。すなわち，会話の当事者が従う方法の作用やその他の徴表は，実際の会話の観察可能な細部としてあらわれているか，その細部から容易に推論[3]することが可能でなければならない。なぜなら，会話という方法が多様な社会生活のほとんどすべての領域で見いだされるという事実から，その方法は，少なくとも通常の社会化を越える特別の訓練や知識なしに，日常生活者が利用可能でなければばならないからである。

3．トランスクリプト

会話分析の目標は，現実におこる会話の観察可能な詳細が，しばしばきわめて広範な応用可能性をもって，共同会話者によって方法論的に構成されているということを前提に，あらゆる現実の会話を構成する共同会話者の「方法の行使」の作業を明るみにだすことであるが，そのためには，ある会話がその観察可能な詳細のレベルでいかにして組み上げられていくのかについて経験的な主張ができなければならない。このような経験的主張の手掛かりとされるのは，会話の録音・録画，および，現実の会話を一定のシンボルにしたがって転記した記録であるトランスクリプトである。十分に完全なトランスクリプトは，現実に起きたと考えられる会話を，会話者が少なくとも潜在的に意味あるものとして聞き取りえた形のままに書き表したものである。トランスクリプトは，紙の上の文字列として書かれるものであるので，現実の時間・空間・意味の中でおこる会話の詳細を完全に書き表すことはもとより不可能である。しかし，それは，会話者が利用できる会話の詳細の重要ないくつかを，明確に示すことができるようなものである必要がある（Psathas & Anderson (1990)）。

つぎに，トランスクリプトの具体例を掲げる。例は，ある参与観察調査（皆川，樫村，藤村（1993））の場面からとられたもので，Aは調査対象施設の職員であり，F，Kは調査者である。F，Kはこの施設にはじめて訪れており，作業に参与することになっている。季節は夏であり，時刻は始業前の朝8時25分ごろである。また，line 16で，「冷蔵センタ」と呼ばれている施設は，同じ組織の別施設であり，Fらが前日に訪れた場所である。転記のための記号は論文末尾に示してある。

［トランスクリプト例］

1A：そうですね，11時までが，作業で* そ ］のあと15分間休憩
2F：　　*はい］
3A：あって*：：］そのあと45分づつ，3こうたい*で：：，いち］時半まで
4F：　　*うん］
5K：　　*あっなるほど］
6A：°みんなおべんとう*たべるの，ね°］
7F：　　*ひるやすみを］順番でとるわけですね
8A：そうしたらあとは：：(0.5) 2時40分までまた作業で，
9A：そのあと15分間また休憩で，あと4時半まで，しごと（す*る），

10K：　　*はい
11A：それで，残業があるばあいは，
12F：はい
13A：4時半から，しごとするの
14　(1.5)
15F：作業自体は（1.0）あの：(0.5) あちらの：れいぼう：：
16　(1.0) ああ，冷蔵センタでみせていただいた*んですけ］ど：：
17A：　　*ええ：］
18F：これ：の：ラベルをはが：し：*て：：］
19A：　　*え：：］おんなじですよ
20F：あ：hh　れ*い］－
21A：　　*で］もここは機械がないんですよね
22()：（　）
23A：手，掛，け*：で：：
24K：　　*あっ　そう*か°そうか°］
25A：　　*自分でこう］袋かけて：
26F：え*：：
27K：　*は：は：は：は：
28A：な　が　す　んで：：，(0.5) あの：：作業自体は：：(1.5) しhずhかでHHHえ：：
29A：す：：HHHH hh hhhhh 冷蔵みたいに*：：：
30F：　　*あっ，ベルトコンベヤ（(音)）：：で：は：
31　あるんですか
32A：え：：ありま*すけど：：：あれにただのせるだけなんで：：：
33F：　　*あっ
34　(5.0)
35A：作業は：：(2.0)°しごく（1.5）単純（2.0）明快（1.0）Heh*Heh Heh］
36K：　　*えーとぉ］ラベルとゆ：：
37　のはあのーあおいのや，あーあかいのですか？

本稿の以下の部分では，このトランスクリプト例を対象として一つの可能な分析例を示しつつ，会話分析によるデータ処理の手順をあきらかにすることを試みよう。

4．会話順番の構造

会話のまとまり

さて，このトランスクリプトの前半部分ですぐあきらかに気づかれる一つの様相は，AがF，Kに向かって何事かを説明している，ということである。その何事かは「一日のスケジュール」ともいうべきことがらであることをわれわれは理解できよう。この何事かは，おそらくF，Kには知られていないことであったことも理解できよう。

会話分析の最初の分析的課題は，このような理解や観察が会話のどのような詳細に基礎づけられているか，ということである。問題は，「なぜAはスケジュールの説明をしているのか」というものではないということに注意しよう。そうではなくて，それは「いかにして『Aがスケジュールの説明をしていること』が会話の中で達成されているか」というものである。

発話の意味的まとまりをとりだすという以上の作業の性質について簡単に考察しておこう。

第1に，分析において用いられる「スケジュールの説明」という概念は，その概念によって分析される当の会話の詳細から独立に定義されているのではない。この概念は，当の会話の詳細に対して何事も付加せず，ただその一定の様相への分析者の注目を指示するためにのみ用いられているのである。これは，その会話的詳細が，「医学的診断」や「報道インタビュー」のようなものであっても同様である。会話分析において，さまざまな異なる会話的状況を区別する指標は，会話の詳細の在り方そのものである（Schegloff (1991), pp. 54-57)。

第2に，分析的に注目される会話のまとまりを生み出すのは，録音されトランスクリプトに記録された会話の詳細である。理想的なトランスクリプトは会話の感知可能な詳細をすべて記録するものであるから，分析的に注目される会話的出来事が会話のある時点においていかになされているかは，トランスクリプトの「それまでの行」に記録されているはずであるといえる。現実には，録音そのものの中からより十分な詳細が発見されることも多いし，またそれが正当でもある（トランスクリプトの性質については，樫村（1994）も参照）。

第3に，会話の中の発話の意味は，いかにしてか，通常の会話者相互の間では，単純に明白なものであるといえる。この会話者にとっての単純明白な意味の「存在」—間主観的な観察可能性—が，会話分析の前提である。会話分析は，この「存在」がいかに具体的な会話のなかで利用されているかを，「一行ごとの」分析によってあきらかにしようとするものである[4]。

順番の構成

さて，会話者にとって，会話を通じて何事かを行うためには，多くの場合「順番」（turn）を獲得しなければならないということが，会話の明白な形式的特徴をなしている。この観点からいうと，Aの行為が「スケジュールの説明」と見える明白な理由がいくつかある。ここでは，line 1 に始まるAの発話それ自体が，その語彙や意味的構造の点から，「スケジュールの説明」らしさを提示していることに注目しよう。そこで「Aによる『スケジュールの説明』」がいかになされたのかをあきらかにするために，まずAによる順番の構成に注目しよう。それはつぎのような観察可能な詳細を含んでいる。

第1に，それは，会話の中の諸過程として実現されている。つまり，それは，「そ→う→で→す→ね→（短い間）→……」という具合に，時間と共に共同会話者の前に連鎖的に順次展開している。第2に，それは「11時までが作業」，「そのあと15分休憩あって」等といった，複数の判別可能なより小さな意味のまとまりから順次に構成されている。第3に，それらのより小さな意味のまとまりは，最初と最後のもの（line 1，line 11-13）をいくぶんか例外として，「そのあと」，「そうしたらあとは」，「あとは」などの表現によって前後が連結されている。これらを通じて，「一日のスケジュール」が前後関係にしたがって説明されている。第4に，最初のものについては，「そうですね」という前置きに聞こえる発言の存在とあわせて，観察可能な形で「最初」性が示されている。第5に，最後のものについては，「それで」の語句がそれまでの一日をあいまいに指示しているようにも見られ，また，「残業があるばあいは」との語句により，「例外の説明」としての性格が主張されており，したがって，それは，観察可能な形式で「後ろに付加されたもの」と見られる。

以上の観察は，Aがいかにして「一日のスケジュール」を会話として説明することが可能だったかという問いに部分的に答えるものである。ここで注目されている会話の方法的特性はいくつかのグループに分けることができる。

まず，順番は，ある文法的形式をもつ一つ以上の意味のまとまりを時間的に連鎖させたものである。順番を構成する意味のまとまりには，語，句，文などがあり，それらは「順番構成単位」（turn constructional unit）とよばれる。一つの順番構成単位が終了に近づくとき，順番自体の終了の可能性も生じる。それは順番が交替する可能性でもあるから，その時点は「移行関連場」（transition relevance place）とよばれる。極端な場合，会話の順番は「そう」とか「え？」，「水」などのように1語のみでも成り立つ。なお，文法構造は，イントネーションなどとともに，順番の可能な終結点の到来の予見を可能にしている。例では，Aの順番は line 13 の「しごとするの」まで伸張されたけれども，それは，複数の「可能な順番終結点」を乗り越えることによってもたらされた伸張である。

つぎに，「順番構成単位」の順次的結合に関する観察は，複数の順番構成単位を特定の意味合いをもった順番に組み立てるための会話者の方法の一つを示しているといえる。それはつぎのようなものである。「そのあとで」等の語句は，11時までの作業のあとに休憩が来るといった，単純な事実性を反映しているだけであるとはいえない。というのは，作業と休憩を結び付ける単純に事実的な関係は，このような時間的前後関係に限られないからである。たとえば，「同じ部屋で」，「疲れるから」といった空間的ないし因果的結合も可能なのである。そこでこれらの語句は，複数の順番構成単位の間に，物理時間的前後関係を「打ち立てる」ものなのだといえる[5]。「それで」等は，英語の and などとともに，複数の順番ないし順番構成単位を，一連のものとして連結する，会話者の操作なのである[6]。それらの語彙の発話により，Aの発話は，その過程のなかで順次に，「一連の出来事（予定）の叙述」として樹立されていくといえる。

最後に，ここで伝達されるべき情報は，最初性と最後性をもつその変形によって枠づけられ，その間に物理時間的な連結を与えられている。

まさにこのような方法の行使によって，Aの順番は

「一日のスケジュールの説明」として理解可能なものになっている。

5．順番連鎖による行為の精緻化

後続順番による解釈

さて，4では「Aのスケジュールの説明」が，Aの順番の観察可能な様相としていかに達成されているかを見たが，Aによる順番がいかなる意味や作用をもっているかは，当の順番の内部構造によってだけでなく，その順番に隣接する順番との間でそれが連続化されることによっても明らかにされる。

この点を示すために，さらに例の観察を続けてみよう。

Aの「スケジュールの説明」は，4番目の可能的終了点（「3こうたいで」の直後）まで，会話相手F，Kの割り込みがほとんどないままに継続しているが，その時点にKの順番による「割り込み」が起こっている。それは「3こうたい」の直後になされており，発話者Kが直前の情報を新奇なものとして意味づけていることを示している（それは「3こうたい」ということを「パズルに対する答え」のように提示しているともいえる）。

Aの「1時半までみんなおべんとうたべる」は，Kの割り込みにもかかわらず，自己の順番を維持しようとするAの努力を表しているが，それとともに，「45分ずつ3こうたい」という記述を，その際に「みんな」が行う行為を特定することによって，展開したものともいえる。それは「3こうたい」という体制が「食事をとる」という目的のために採用された工夫であるという意味合いを作り出しているように見える点で，Kの順番を展開したものでもある。

このAの順番は，Fによって割り込まれる（line 7）。Fの割り込みは「おべんとう」というAによる説明展開の主要部分の発話の直後に行われており，また，Kによる割り込みに引き続く位置を占めてもいる。そしてこの位置にあることを加味して考えると，Fの割り込みは，Aによる説明をとりあげて「昼休み」という記述へと言い換え，「理由・目的のための工夫」という，より明白な形式（「わけ」）へとそれをまとめあげるもののようにみえる。

このように，Aの発話順番に「対して」おこなわれている割り込み，そしてそれらへのAの反応は，Aの順番そのものの進行の過程において，また，その過程として，Aの進行中の順番（turn-so-far）がそれぞれの時点で「進行中のスケジュールの説明」であることの理解を表示しあっている。また，K，Fの順番が理解の標的としているAの順番が「スケジュールの説明」として理解されうるように構成されており，このことがK，Fの順番によって行われている意味作用（理解の表示，説明の言い換え）を「進行中のスケジュールの説明としての理解の表示」として理解可能にしている。さらに，これらの発話は，その順次的連鎖を通じて，共同の説明の生産という行為を行っているといえる。そうしてこのような共同行為が行われたこと自体が，A，K，Fの間の「意志疎通」や「共通理解」の存在を証拠立てるものでもあることも理解できる。

順番の連続化により，「AとF，Kのこの会話」が「Aによる今日のスケジュールの独白」,「今日の仕事の予想」や，まして「A，K，Fの独白の集合」などでもなく，「Aによる，F，Kに対する1日のスケジュールの説明（新奇な情報の提供）であること，およびその内容」が，会話的相互行為の詳細としてその度ごとにあらためて構成されていくのである。より一般的にいうと，会話の順番は，それに先行する順番が作り出した関連性の網目のなかに生産されてくるのだが，当該の順番がその網目のなかに組み入れられるという事情により，その網目自体が変化していくのである。

複合的順番の維持

これまでの検討の結果として，会話者が，会話を通じて何事かを行うためには，順番を獲得し，それに方法的な内的構造を与えるとともに，隣接する諸順番に対して適切なコントロールを行うことができなければならない，といえるだろう。この実践的原則の現われと見られる方法は，われわれの例では，複合的順番を維持するためにも見られる。

第1は，複数の順番構成単位からなる順番を維持するために，発話者が，割り込みを予防するための順番構造を用いるという現象である。われわれの例では，「スケジュールの説明」のためにAが採用した順番の内部構造は，複数の順番構成単位からなる順番の維持を要求するものであったから，複合的な順番を会話の中で維持することが1つの相互行為的課題となっていた。この課題はK，Fらによる新たな順番の開始を抑止することによって達成されるが，それを達成する1方法は，順番が複合的なものであるという予期を前以て投射しておくことである。Aの順番の冒頭におかれた「そうですね，」は，「語るべき多くのことがある」との印象を作り出し，また，各終了可能点において文法的に未完結性が表示されることは「さらにまだ語るべきことがある」との印象を作り出すことで，この作業を行うものである。

第2は，複合的順番の聞き手の側が，その順番構成単位の切れ目を越えて順番が伸張されることを語り手に対

して承認し，促進するという現象である。たとえば，line 2，line 4 では，FによるAの順番への割り込みが見られるが，いずれのFの順番も，割り込まれるAの順番との関係で，つぎの特徴をもっている。まず，割り込む順番の開始は，割り込まれる順番の順番構成単位の切れ目（順番の可能的終結点）の付近にある。また，割り込む順番の長さは短く，したがって順番の重複は短時間で解消される。最後に，割り込む順番は，語りを受容したことを主張する徴（「はい」，「うん」）からなりたっている。これらの特徴は，伸張される順番の合間にさしはさまれる順番がしばしば示す特徴であり，全体として，割り込みの対象となる順番の聴取を主張し，その続行を承認し，促すという作業を達成するものといえる。

6．順番配分による連続の構成

「スケジュールの説明」というAの会話的行為は，伸張された順番を獲得し維持するという形式的な方法と必然的に結び付いていた。しかし，会話的行為のなかには，さらに進んで複数の順番を連続化するという方法の使用を要求するものがある。たとえば，挨拶をするという行為は，それ自体でも一つの行為でありうるが，聞き手によって挨拶が返されるときに，より十分な意味で1つの行為としての地位を獲得するといえる[7]。

以下では，まず，順番の移行を管理することによりその連続化を行う基本的メカニズムについて説明し，つぎに，会話に特定の方向性や評価的意味合いを与えることに役立つ連続化の諸方法を紹介する。

順番配分のメカニズム

複数の話者の間で，長い沈黙や重複によって妨害されない，順番交替が行われることは会話の基本的な様相である。会話者達が複数の順番を用いて何らかの行為を実現するためには，順番の秩序ある交替というこの基本的な様相が会話者自身の手によって実現可能でなければならない。サックスらの研究の重要な成果は，順番を複数の話者に配分するために会話者が利用できる単純なメカニズムの発見であった（Sacks，Schegloff & Jefferson (1974)）。

われわれの例では，Aの伸張された順番は line 13で終了にいたるように見え，それに続いて，短い沈黙があり，Fの順番が開始される。この順番交替にはつぎの特徴が見て取れる。

まず，Line 13に至るAの進行中の順番は，順番の付加的拡張の特徴はもつが，はっきりした終了の標識をもっていない。Line 14の沈黙は，いくつかの理由で生じている。第1に，それまでの発話者であるAが継続しなかったこと，第2に，A以外の共会話者であるF，Kがただちに順番をとらなかったことである。これらの点からいうと，まず，line 14は，Aの沈黙として聞きうるものであり，「もう話すことはない」ことの表示である。つぎに，F，Kの沈黙としてもそれは聞きうるものであり，それはAの順番継続を承認し続けていることを表示しているといえよう。

この沈黙は，Fが発話を開始したことによって終結される。Fの発話開始は，line 14の沈黙をAによる順番終了として聞くことの表示であり，同時にAへの順番継続の承認としての沈黙の意味合いを打ち消す効果をもっている。このことにより，さらに，line 13にはAの順番の終了としての意味が付与されようとしている。

ところで，会話者にとっては，line 13の沈黙は，それに隣接する発話やその時点での関連性の網目がどのように変化しているのかが不明であるという「問題」を構成している。それは，順番の終了や開始という出来事も会話的行為である以上，会話の発展的様相に由来する意味の不定性から自由ではありえないという事情から生じている。そこで，もし多くの会話において，順番の移行がスムーズに行われているのであれば，この問題がなんらかの方法で実際的に対処されていなければならないといえよう。そしてその対処のなかには，Fの方法，つまりあらたな発話の自発的な開始が含まれる必要があろう。

サックス等（Sacks，Schegloff & Jefferson (1974)）によれば，以上の問題的状況は，繰り返し現われる会話の普遍的な形式的特徴の一つであり，別の制約が存在しなければ，「順番配分の規則」とよばれるつぎのような一般的方法によって解決される。

まず，会話における発言の権利と義務を配分するためには，2つの方法の使用が観察できる。第1に，現在の話者による選択である。これは，現在の順番を持っている者が，その順番をもちいて，つぎの順番を取る者を選択するという方法である。第2に，自己選択である。つぎの順番をとろうとする者が，自らを選択するという方法である。

さらにこれらの方法は，つぎのように組み合わされることで，順番のスムーズな移行を実現する。

「　規則1　あらゆる順番の，最初の終結可能点で，(1) もしこれまでの発話順番が『現在の話者による選択』という方法の使用を含んでいれば，その選択された者が発話してよく，(2) もしこれまでの順番によってそのように選択された者がないときには，誰もが自己選択するという方法を使用してよく，その際は最初にその方法を使用した者が発話の権利を獲得するが，(3) 誰も順番を

とらなかったら，現在の話者が順番を継続してよい。

「　規則2　規則1(3)によって現在の話者が順番を継続するとき，つぎの終結可能点で，規則1が繰り返し適用される。この再適用は，順番が実際に移行するまで，おこなわれる。」(Sacks, Schegloff & Jefferson (1974), p. 704)

順番配分の規則は，日常的な会話において，前以ての順番を割り当てたり，順番移行の管理権を付与するなどの体制がないにもかかわらず，秩序ある順番交替が広く見られるという事実を生み出すための，会話者の方法を特定したものである。それによると，会話の順番配分は，会話の順番そのものの進行過程のなかから，現在の話者と共同会話者とによって達成することが可能になっている。われわれの例は，規則1(2)によりFが自己選択により順番を取得した場合だといえることになる。

隣接発話対（adjacency pairs）

複数の順番間の関連性は，順番移行という問題にかかわるもののみではない。隣接発話対とよばれる方法は，基本的に，先行する順番を用いて後続する順番に型的制約を生み出すことを可能にする。隣接発話対の明白な1例は，問い・答えの対である。つまり，先行する順番で問いがいかにしてか行われるならば，直接に後続する順番ではその問いに対する答えが行われなければならない。

隣接発話対は，一般的にはつぎのように特徴づけられる。(1) 2つの発言によって構成され，(2) 隣接的に配置され，(3) 異なる発話者によってそれぞれ発話される，2つの発言であって，それらの発言は，(4) 第1部分と第2部分という相対的順序関係にあり，(5) 2つの部分の関係が型をなしているとみなされている（Schegloff & Sacks (1974), p. 238)。このような型としては，問い・答え，挨拶・挨拶，要請／招待・受諾／拒絶，苦情・否定／拒絶／同意，批判・否定／肯定，申込・受容／拒絶，などが見られる（Sacks, Schegloff & Jefferson (1974), p. 716)。

隣接発話対は，現在の順番の進行過程のなかから，後続する順番に関する規範的制約を生み出すという点で，2つの順番を内側から秩序づける作用をはたす。このような作用がいかに利用されているかをわれわれの例を用いて見てみよう。

Lines 15-18のFの順番は，いくつかの特徴をもつが，そのうち後続する順番に対して与えられた規範的制約等を中心に見ていくことにする。まず，それは問いの前置き，または情報提供の要請としての構成をもつ隣接発話対の第1部分であるといえるから，後に続くべき順番に対して，問い／要請に型的に対応する第2部分としての応答がなされるべき位置としての制約を加えている。また同時に，この問い／要請は，後続する順番をとるべき発話者として，応答の基礎となる知識の想定される所持者としてのAを選択するものでもある（そのことは，Aによる line 17での促し／承認，line 19での「熱心さ」をあらわす割り込みをともなう応答開始によっても表示されている)。

別の隣接発話対の例は，line 30のFの問い，line 36のKの問いである。両者に共通する特徴は，いずれも先行する順番に割り込むものであり，しかも，割り込みの対象となる順番の中断またはその直後での終了をもたらしているということである。これらの特徴は，隣接発話対第1部分が，先行する順番からある程度まで独立して，ある連続的意味合いをあらたに打ち立てる効果をもつことを表している。また，先に取り上げた lines 15-18のFの問い／要請も，先行する順番によって打ち立てられていた関連性（それまでの会話が「一日のスケジュール」に関する説明を行うものであること）を打ち消し，あらたな主題（「作業自体」）を導入するものである点で，新規の連続的意味合いを生み出すものである。

こうして，隣接発話対という技術は，既存の順番連鎖が生み出した関連性構造の相当部分を消去し，あらたな関連性を導入するという効果をもつものである。この効果の前提は，隣接発話対の第1部分が，進行中の会話の関連性構造から比較的自由に，順番をとることができるという事情である[8]。隣接発話対のこの特性は，順番連続を「意図」や「計画」に沿って，会話者が共同にまたは単独で組織する方法的可能性を提供している (Schegloff & Sacks (1974), pp. 239-240)。

7．発話の連続化と「制度」

制度的発話

順番配分規則，隣接発話対，その他の順番連続化の諸方法をもちいることで，会話者は，ある方向に向けて会話を進行させることが部分的に可能になる。こうして会話は「意図」「目的」「理念」「原則」「規範」などの語で指示される，裁可された社会的パターンに照らして方向づけられることが可能になると考えられる。

主としてこのことから，順番連続化の方法は，会話の組織化自体への研究関心を越える社会学的重要性をおびている[9]。というのは法，医療，教育，科学などの「社会制度」やそれらを構成する「社会規範」は，法廷その他の制度的場面を通じて，構成，維持されると推測されるが，そのような場面は，複雑な会話連続を含んでおり，それらの複雑性は「規範」「計画」「意図」などによ

る会話制御の存在を推測させるからである。会話分析の諸成果を制度分析につなげていくには，なお理論的検討が必要であるが，さしあたりおおまかな方向はつぎのように考えることができるように思われる[10]。

もともと，社会のメンバーである会話者がただ会話を進行させることだけを目的として行為することは滅多になく，会話者は，会話一般にではなく，会話を通じて，一定の報告可能性（Garfinkel (1967), p. vii)を備えた何事かをおこなうことに関心をもっているといえよう。たとえば，社会的出来事を報道すること，社会学的構造の調査をおこなうこと，特定の方法にしたがうカウンセリングをおこなうこと，法的責任を追及することなどである。

社会のメンバーは，さまざまな水準の意図，計画，事前的考慮などによって，会話を含むコミュニケーションを制御することによってこれらのことを行うが，その際会話の方法が広範囲に用いられると考えられる。そこでは，エスノメソドロジー研究が一般的にあきらかにしているように，「特定の言葉で述べられたこと」とは異なる「意味」が伝達される。「言表」と「意味」の間を埋めるのが，社会メンバーの会話能力である。会話の諸方法を適切に用いるならば，会話者は，特定的な規範や文化，イデオロギーを備えた社会的制度を，会話連続のありさまとして達成することができるであろう（樫村(1989)）。

順番をさまざまなニュアンスで連続させることを可能にする会話の一般的諸方法の使用によって，意味の複合体としての制度や規範はコミュニケーションの水準に累積的に現前化していくと考えられる。会話の中から特定の詳細な様相を備えた「制度的な語り」が現前化してくるのはこのときである。なお，あらゆる会話の方法が会話の詳細として現前化していなければならないという方法的基準からいうと，会話の中に発見されるべきなのは「社会制度」一般ではなく，いつも特定の文化的ニュアンスをもった経験的な「社会制度の実例」や「社会諸制度の混合例」である。

エスノグラフィーの制度

本項の残りの部分では，トランスクリプト例を用いて，「制度的会話」の一例を精査してみよう。われわれが問題にしたいのは，再びline 15にはじまるFの問い／説明要請の順番である。

まずつぎの観察ができる。第1に，Line 15のFの発話は，Aの「説明」に対する「説明の受容」が表示されうる連続的位置でおこなわれているが，説明の「単純な受容」とはいえず，むしろ，つぎの観察可能な特徴をもっている。第1に，発話の「言及対象」の観察可能なずれにもかかわらず，「情報の提供」という順番の後に続く場において，適切ともいえる，「情報の所持」（「作業自体は見せてもらった」）を主張していること。第2に，Fが，いま話題になっている「作業」について「慣れ知っていること」を推測させること（したがってこの順番は「非優先的形式」をもっている）。第3に，「質問の前兆」ないし「説明要求の前兆」でありうること。したがって，この順番に引き続いて「答え／情報提供」が規範的に期待されている。第4に，「作業スケジュール」から「作業自体」への段階的話題移行の一環としての話題提供と見られうること。そのことは，line 18で順番が継続する際に，「ラベルをはがす」という具体的な作業の一部へ誘導的に言及することによって，さらに明白化されている。

以上の観察からは，Fの順番が，Aの説明の情報価値を基礎として会話を展開することを選択せず，関連する事項への情報提供を依頼することを選択していること，さらに，その際，明白にはそう述べずに，Aの説明を受容するという会話形式を尊重しつつあるいはそれを利用しつつその選択をおこなっていること，これらが結論できる。この特徴を示すために，Fの順番の作用を「質問／誘導」と名付けておこう。

第2の観察は，lines 17, 19のAの「応答」は「作業の同一性」を主張しているが，応答としては「最小限」の形式をもっており，拡張されたFの質問／誘導（line 18）に対しては，やはり「同一性」を主張するということ以上のことをしていないことである。すなわち，Fによる隣接発話対第1部分によって設定された規範的期待にてらしていうとAはその期待に対する無反応または抵抗を表示しているのである。

そこで，第3に，この期待のずれは，line 20の「困惑した」応答，ないし，再質問／再誘導を引き起こしていると考えられる。Line 21は，Fの困惑に直面したAが困惑の原因をさぐりつつ[11]「無条件の同一性」の主張を変更（条件化）したものであり，line 23は，なお明白な受容の応答がないこと（line 22）に対して，主張をさらに詳しく説明しようとするものである。この「手掛けで」という説明については，Kの受容がおこなわれる（lines 24, 27）が，主要な質問／誘導者であるFは，なお単純な受容をおこなっていない（line 26）。

第4の観察はつぎのことである。Line 28のAの順番は，これまでの主張を再び「作業自体」（これはline 15で話題提供したFの順番で用いられた言葉の再現である）に結び付けるが，今度は「冷蔵」との違いについて

の留保が付加されようとしている（line 29は「冷蔵みたいにうるさくはない」の中断だと考えられる）。この説明は，最終的には，lines 32，35の「作業の単純明快さ」という結論へとまとめられている。多くの方法の行使とならんで，この結論は「作業の非問題性」ともいうべきものの主張として，lines 17, 19でおこなわれた説明との一貫性を構成している。Line 36 のKの発話は，の質問／誘導で用いられた「ラベル」を語句としても意味としても再びとりあげており前の連続が再開されるという予期を強く作り出している[12]。

さて，以上の会話は，きわめてインフォーマルなものではあるが，特有の知識，役割体系，行動規範などによって定義される，具体的な制度の存在を浮き上がらせていると主張したい。その点を簡単に説明するとつぎのようになる。

第1に，F, Kの発話は，この施設の作業についての知識を，会話者の間の知識の差異として配分している。具体的には，F, Kは，「冷蔵センタ：：」の訪問に由来する知識をもっているが，Aは「ここ」での作業についての十分な知識をもつ者として会話的に取り扱われている。

第2に，F, Kの発話は，この施設の作業について説明することに関して，会話者の間に規範的役割を配分している。それは，Aの説明を単純に受容するという構造をもつことは滅多になく，そのことで，つねに「もっと聞くことがある」という印象をつくりだすことにより，おこなわれている。

第3に，F, Kの発話は，自他の行為を規範にしたがうものとして提示している。それらは，Aによる自発的説明を誘導しようとする技術の行使要素を数多く含み，そのことにより，F, Kの行為の基準が，「当事者の観点からの状況の説明を生み出すべきである」とか，Aの行為が「調査協力者は自発的な情報の提供を期待される」等の社会学的フィールドワークの規範やイデオロギーにしたがうものであること，を提示している[13]。

第4に，Aの一連の説明は，施設の知識，役割，規範，イデオロギーなどを反映したものでありうる。その点についての分析は展開する余地がないが，少なくとも，それが，施設の作業という，一定の意味世界の記述カテゴリー（「作業」「ラベル」「ここ」「機械」「ベルトコンベヤ」等）を直接間接に用いて，施設の出来事（スケジュールや作業の性質）を記述しているという点で，すでに十分な制度的性質を帯びているといえる。

8．結　論

本稿では，会話分析の方法的基準との関連に留意しつつ，一つの会話例に即して，会話分析の方法を記述してきた。その際，その会話例固有の構造に深入りすることになったが，それは，会話分析というものが，会話の普遍的構造を一般化的に取り出そうとするものではなく，普遍的方法の個別的使用による個別事例の構成のあり方を記述しようとするものだからである。われわれの会話例を通じて，順番交替，順番配分，隣接発話対の使用などの普遍的構造の作用が明らかである。また，順番構成単位，順番，順番連鎖，順番連鎖の制御構造などの普遍的な会話構成要素が存在する。本稿の最後の部分では，制度的会話をとりあげ，それが，より日常的な会話と同様に，さまざまな普遍的会話構成要素の方法的な使用によって編み上げられていくものではないかと示唆した[14]。これらを通じて普遍的な会話の形式的構造がいかにして個別の会話例を作り上げているのか，これが会話分析の解明課題であることを主張しようとした。

具体的事例としてインフォーマルなエスノグラフィックなインタビューをとりあげた。通常のエスノグラフィー研究においては，それは「施設の作業」についての一片のデータを運搬する容器にすぎないであろう。本稿では，そのような通例的な研究関心を意図的に度外視し，会話という形式そのものに綿密な分析的関心を適用するときに，会話それ自体がデータとして，複雑な社会組織としての姿をあらわすことを，明示しようと試みた。とはいえ，会話分析は通例的な研究関心と交差する点をもたないわけではない。会話そのものの組織性は会話のもつ「データとしての情報」を包含するものであり，その分析は会話の複合的で重層的な様相として「施設の作業が語られたこと」を再特定することを排除しないはずだからである。制度的会話が重要な解明課題であるのはそれを通じて会話分析が通例的関心と交錯しうるという理由にももとづくのである。

＜トランスクリプト記号＞

,	：区切りのイントネーション
。	：終了のイントネーション
*	：同時発話，割り込みによる重複の開始
〕	：同時発話，割り込みによる重複の終了
：：	：引き伸ばされた発声（：の数は長さ）
°	：弱められた発声（つぎの°まで）
（数字）	：沈黙（数字は秒数）
（文字）	：聞き取れない発話（文字は推測または音表

記），発話者不明
文　字　：ゆっくりした発話
文字　：強調された発話
－　：言いさし，発話の中断
＝　：連続した発話
hh　：ブレス（吸気・無音）
HH　：ブレス（呼気・無音）
HeH, heh　：ブレス（有音），笑いなどの激しい呼吸

引用文献

Atkinson, J. Maxwell & Heritage, John (eds.) 1984 Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis. Cambridge University Press.

Boden, Deidre & Zimmerman, Don H. (eds.) 1991 Talk and Social Structure: Studies in Ethnomethodology and Conversation Analysis. Polity Press.

Button, Graham & Casey, Neil Generating topic: the use of topic initial elicitors. In Atkinson & Heritage (1984: 167–190.)

チザム，R. M. 1994 『知覚－哲学的研究』勁草書房.

デイヴィドソン，D. 1991 「思いと語り」野本和幸他・訳『真理と解釈』勁草書房，167–189.

Drew, Paul & Heritage, John (eds.) 1992 Talk at Work: Interaction in Institutional Settings. Cambridge University Press.

Garfinkel, Harold 1967 Studies in Ethnomethodology. Prentice Hall Inc.

Heritage, John 1984 Garfinkel and Ethnomethodology. Polity Press.

Heritage, John & Atkinson, J. Maxwell Introduction. In Atkinson & Heritage (1984： 1–15.)

樫村志郎 1989 『「もめごと」の法社会学』弘文堂.

樫村志郎 1994 「＜席交替＞の社会的達成―インタビューにおける回答者地位の委譲をめぐって―」『現代社会理論研究』4：187–199.

Levinson, Stephen C.: 1983 Pragmatics. Cambridge University Press.

皆川満寿美，樫村志郎，藤村正之 1993 「共同作業所の社会学のために―社会福祉施設をめぐるフィールドワークより―」『武蔵大学人文学会雑誌』25：103–150.

西阪仰 1990 「心理療法の社会秩序 I ―セラピーはいかにしてセラピーに作り上げられていくか―」『明治学院大学社会学部付属研究所年報』20：1–24.

西阪仰 1992 「エスノメソドロジストは，どういうわけで会話分析を行うようになったか」好井（1992：23–45.）

Pomerantz, Anita: 1984 Pursuing a response. In Atkinson & Heritage (1984: 152–163.)

Psathas. George 1991 The structure of direction-giving in interaction. In Boden & Zimmerman (1991: 195–216.)

Psathas, George & Anderson, Thimothy 1990 The ractices' of transcription in conversation analysis. Semiotica, 78: 75–99.

Sacks, Harvey 1992 a Lectures on Conversation. Volume I. Edited by G. Jefferson. Blackwell.

Sacks, Harvey 1992 b Lectures on Conversation. Volume II. Edited by G. Jefferson. Blackwell.

Sacks, Harvey, Schegloff, Emmanuel A., & Jefferson, G. 1974 A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. Language, 50: 696–735.

Schegloff, Emmanuel A. 1991 Reflections on talk and social structure. In Boden & Zimmerman (1991: 44–70.)

Schegloff, Emmanuel A. 1992a Introduction. In Sacks (1992a: ixlxii.)

Schegloff, Emmanuel A. 1992b Introduction. In Sacks (1992b: ix–lii.)

Schegloff, Emmanuel A. & Sacks, Harvey 1973 Opening up closings. In Turner (1974: 233–264.)

シュッツ，アルフレッド 1983 『社会的現実の問題I』渡部光他・訳，マルジュ社.

シュッツ，アルフレッド 1985 『社会的現実の問題II』渡部光他・訳，マルジュ社.

Turner, Roy (ed.) 1974 Ethnomethodology: Selected Readings. Penguin.

山田富秋 1995 「会話分析の方法」『岩波講座・現代社会学 3・他者・関係・コミュニケーション』岩波書店，121–136.

山崎敬一 1994 『美貌の陥穽』ハーベスト社.

好井裕明 1994 「会話分析」木下富雄・吉田民人編『記号と情報の行動科学』福村出版，2–19.

好井裕明（編） 1992 『エスノメソドロジーの現実』世界思想社.

註

1） 会話分析についての説明として一般的に，山田（1995），好井（1994），西阪（1992），Heritage & Atkinson（1984），

Heritage (1984), Chapter 8 を参照。会話分析の理論的体系を知るためには，Levinson (1983) が適している。会話分析の学問的展開については，Sacks (1992a, 1992b) および，その解説として Schegloff (1992a, 1992b) がある。

2) 本稿でおこなう説明は，いくつかの点において，会話分析の研究領域で標準的に受け入れられているものというわけにはいかない。本稿はまた今日盛んに発表されつつある具体的な研究成果を公平に紹介しようとするものでもない。これは，著者の能力の限界というほかに，会話分析方法が会話自体への忠実性の要請から標準化されにくいこと，その研究成果も会話の一般的な構造としてよりも個々の会話の構造的解明を主とすることなどの不可避の結果でもある。

3) 多くの日常的推論の方法は社会的に裁可された思考方法でもある。それらは社会的起源をもつ実践的知識としての形式をもつ（シュッツ (1983, 1985)）。言語哲学と現象学的認識論のより最近の業績は，事物の明証的知覚それ自体が，ある主張をべつの主張よりも確からしいとさせる，言語と行為の社会的な網目の中でのみ，行われることを示唆しているように思われる（チザム (1994)，デイヴィドソン (1991) など）。それらによると，われわれは，社会の中にあることの帰結としてある事物が「知覚される」ことを可能にするような意味的コミュニケーション手段，すなわち言語をもっているのである。

4) 会話分析は，会話の詳細が会話者にとってと同様，分析者にも観察可能であることを仮定する。そうだとすれば，会話者と分析者が互いに観察することが不可能な程異なった「会話文化」に属している場合には分析の前提が欠けるということになろう。会話分析が問題にしているのは，「日本人はノーといわない」といった次元の「文化」ではないから，国語の差異はあきらかに「会話文化」の差異ではない（Sacks, Schegloff, & Jefferson (1974), p. 700, note 10)。発声能力や視覚的能力その他の発話能力の差異も会話分析をただちに不可能にするものではない。もっともそのような差異が会話の詳細な在り方をどう変えるかは興味深くまた実践的にも重要な問題である。

5) 物理時間による記述は，調査者と職員とのあいだの疎遠な関係を構成するものでもある。

6) 「それで」などの語句は，会話の途切れのあとに，話題の連続性を保ちつつものとして会話を再開する際にしばしば用いられる。たとえば，セラピーの場面からつぎの例がある（例1，2）。また，道順を教える会話で and が用いられる際の特徴も本文の例に似ている（例3）。

［例1］

T：あっそう＝
P：＝うん
(12.0)
→P：それで，そしたら，帰ってきたら，やっ
（西阪 (1990) p.13）

［例2］

T：うん
(2.5)
→P：あ：そしたらね
T：うん
P：あの，なんだっけ，ほら　で
（西阪 (1990) p.13））

［例3］

Answerer: Oka:y why dontcha come up one twenty eight? (0.2)
Caller: Yes. (0.2)
→Answerer: An take two A, (1.0)
Caller: Yes, (.)
→Answerer: u:m (0.4) Two A will take ya right across Mass avenoo an ya just stay on two A,
→ (0.6) uh until ya get to Lowell Street.
((clarification sequence ommitted—引用者))
→Answerer: an ya turn right on Lowell Street. (1.2) an its about (.) quarter to a half a mile (0.4) um, pt (.) take another right on Bartlett Avenoo. (1.0)
Caller: °Okay°
→Answerer: an that takes ya right to the Academy. (1.0)
Caller: °Okay° an its one building?:: (Psathas (1991), pp. 196–197))

7) ガーフィンケルによる著名な「デモンストレーション」は，挨拶という行為の社会的に裁可された性質をつぎの事例で明らかにしている。ここでは，学生（E）が友人（S）の挨拶に対して，それを承認しない応答をし，それが友人の不満を引き起こしている。

(S) Hi, Ray. How is your girl friend feeling?
(E) What do you mean, "How is she feeling?"
Do you mean physical or mental?
(S) I mean how is she feeling?
What's the matter with you?
(Garfinkel (1967), p. 42)

これに対して，挨拶が適切に応答されるときには，状況に応じた展開，たとえば話題についての会話へのスムーズな移行が見られる。

A: . . . llo ::,
B: G'morning Olivia,
A: Howuh you::,
B: Fine.
B: How'r *you
*That's good ehheh
A: Whaddiyu kno:w.
B: °hh Jis' got down last night.
A: Oh you di:d,?
((continues on topic)) (Button & Casey (1984), pp. 167–168)

8) 順番連鎖の制御能力という点で，隣接発話対とは異なるが，やはり強力な効果をもつ装置に「後続する順番における修復」(repair) の形をとるものがある。たとえば，

Ben: They gotta-a garage sale.
→ Lori: Where.
Ben: On Third Avenue. (Sacks, Schegloff & Jefferson (1974), p. 717)

Lori の発話は，先行する順番の「トラブル」を指示しつつ構成しており（それは「場所が不明であること」といえる），標的の順番の発話者をつぎの順番の発話者として選択するとともに，「トラブル」の発見と「救済」の提示をその順番で行うことを要求するものである。本文であつかっている例では line 30の F の問いは，修復にも聞こえる。

他方，隣接発話対の第2部分の発話のように，ある発話に引き続く発話が何種類かのカテゴリーにわけられる際，あるカテゴリーの発話は間をおかずスムーズに発せられるのに別のカテゴリーに属する発話は，ためらいや間や弁解などが前置きされて発話されることがある。たとえば，要請に対して受諾を述べる応答は前者（選好的応答）だが，拒絶を述べる応答は後者（非選好的応答）の形式をとる。この種の組織化方法は「選好組織」とよばれるが，これは，すでに導入された連続的関連性を条件づけたり，くつがえしたりする可能性を提供するものといえる。本文の例では，line 32-35のAの答えは，Fの問いが「作業の複雑さ」を含意している（したがって「作業の複雑さ」を示す応答が選好的になる）ため非選好的な形式をもち，実際に「作業の単純さ」を主張するものとなっている。選好組織に関しては，Atkinson & Heritage (1984), Part II) 参照。

9) 多くの会話分析の解説が指摘しているように，会話分析は，通常性への社会学的関心から始められたものであり，会話自体への関心から始められたものではない（西阪(1992)）。また，サックスらが研究したデータも，自殺防止センターへの電話，警察への電話，グループ・セラピー・セッションなど，制度的場面が多かったことも指摘できる。

10) ある発話が意図的に行われたかどうかという事実は，会話の詳細としてそのことの帰結が現われていないかぎり，その発話に関する会話分析の主張の妥当性にいかなる影響ももたない。したがって，少なくともつぎのようにいえる。会話分析は，会話の実践の一定の詳細を「意図性」の判定基準としてとりあつかうことで，「意図」の抽象的定義に依拠することなく，それについて何事かを述べることができることを可能にする研究プログラムである，と。

11) Pomerantz (1984) は，ある発話に対して期待される反応が起こらないとき発話者は (1) 誤解をはらす，(2) 想定された共通理解を再検討する，(3) 自己の立場を変える，という3種類の対処ができる，と述べている。本文のAがおこなったのは (3) である。

12) この後の会話を単純化してしめせばつぎのようである。Line 50のAの結論は再び，単純性を主張している。

37 K：のはあのーあおいのや，あーあかいのですか？
38 A：はい
39 K：ラベルをはがして
40 A：はがして，こっちへならばして
41 K：ここで
42 A：で袋がけして
43 K：で袋ありますね
44 A：で
45 K：ここいれて，内袋ですね
46 A：そうです
47 K：でむこう，あのむこうに
48 A：はい
49 K：ながすんですか，はい
50 A：簡単ですね

13) 会話的行為には「順番」という側面だけがあるのではないから，「順番」という概念に基づく分析も，会話分析のすべてではありえない。たとえば，語彙の選択や規範の利用などは会話者の属するカテゴリーに関連してよりよく分析できるかもしれない。性別というカテゴリーに会話分析を結合する試みとして，山崎 (1994) がある。

14) この観点からは，個々の制度例の方法分析の可能性が展望できるとともに，法，医療などの制度が自然な会話をその作用に組み込んでいるという事実が興味深いものとして浮かび上がってくる。また，日常会話自体も一つの特有の方向性と関連性構造をもつ1制度としてとらえうるように思われる。これらの展望を基礎づける作業とそれにかかわる理論的検討はきわめて重要な課題だが本稿では扱うことができなかった。

The Tasks and Methods of Conversation Analysis

SHIRO KASHIMURA (*Kobe University*)

"Conversation Amalysis"(CA) consists of various methods of distinguishing and formulating the natural "orderliness" of ongoing actual conversation, where the features of "orderliness" are member's products as well as resources available "in situ" for the conversants themselves. Included in this "orderliness" of natural conversations are such phenomena as; the conversational "turns", the units for constructing turns, the interpretation of a turn by the following turns, the maintainance and management of "turn expansion", the techniques and rules for allocating turns among conversants, the machanisms for controlling sequential organization of related turns (such as "adjacency pairs"), the institutionally characteristic "shapes" of turns and turn-sequences. The present paper tries to explicate the basic concepts of CA and its techniques by (1) examining its methodological foundation, (2) examining an instance of actual conversation, being tape-recorded in the course of an ethnographical fieldwork, where the ethnographer-interviewer observably utilizes both everyday and professional techiniques for doing conversation. The paper concludes that by adopting CA approach the multicple layers of conversational meanings and techniques, everyday and institutional, are made available for rigorous technical analysis.

Key words: conversation analysis, methodology, ethnomethodology, ethnography, investigative interview